東京とその前身江戸

―― その社会経済的展開 ――

柴　田　徳　衛

序章「戸京」のすすめ
江戸開府より四百余年
城下町と城内町 ―― 戸京とパリや中国の城市
世界二大都市の膨張 ―― 戸京とニューヨーク市
第一章　世界に比類なき制度
第1節　江戸幕府の専制体制
第2節　鎖国・参勤交代の功罪
第3節　予期せざる功績 ―― 悪性伝染病の経路遮断
第4節　都市問題の把握 ―― ロンドンと戸京の都市政策
1）都市問題の認識
グラントの死亡表
ペティ　に見る「市民の値打ち」
荻生徂徠の「人返えし」政策
2）西欧都市政策の展開
チャドウイック　報告
ロンドンの下水道百年祭
ペッテンコーファーの活躍
3）輝ける細菌学研究
細菌学の祖ロバート・コッホ
偉大な日本医学界
4）鴎外の悲憤慷慨と迷える下水課
5）一銭五厘のピヤポッポ

序章　「戸京」のすすめ

江戸開府より四百余年

明治維新とともに江戸はなくなり，新しく東京が生まれた。「散切り頭を叩いてみれば文明開化の音がする」とはやされた。なるほど江戸の町から，将軍さまや大名そして丁髷姿の武士も消え，代りに書生や髭を生やした官員さんが新東京をカッポする。汽笛一声新橋を陸蒸気が西の横浜へ走り出し（明治5年），同時にそこから東の都心へ向けハイカラな銀座煉瓦街が姿を現わす（同10年完成）。コンドル設計の鹿鳴館では，内外の紳士淑女による舞踏会が，軽やかなメロディーにのり始まる（同16年）。洋風建築が次々と建ち並び，一丁ロンドン（丸の内オフィス街）が建設される（同27年より）。すべてが新しい東京だ。

確かに表面はこの通りである。しかし東京が「ご一新」の掛け声とともに古い江戸と関係なく，全く別の都市原理により造られ始めたのか。最近，開府四百年祭が祝われた。徳川家康が征夷大将軍に任じられ，1603年に武蔵野の荒野にある小村落・漁村（太田道灌が暗殺された1486年以来さびれていた）から，幕府の所在地として江戸の築城，大都市の建設が始まった。

この巨大な城下町の建設原理と，表面文明開化に装われた東京のそれは，すべて別ものだったのか。どうも両者にかなり共通の原理が流れているようだ。江戸の状況ないし都市政策が，現在まで東京に色々と影を落としているのではないか。

江戸と東京を，仮に両市の名から末尾一字づつを取り「戸京」という四百年以上続いた一つの都市として，その大きな流れを眺めたらどうなるか。欧米都市の17世紀以来貫いてきた基本原理なり都市政策と較べながら，「戸京」を眺めると（本文中必要に応じ江戸と東京に分けても書くが），どんな特色が現われるか？

城下町と城内町 — 戸京とパリや中国の城市

江戸は，徳川将軍が天下に号令する中枢「江戸城」の城下町として建設された。将軍により，将軍を守り，その栄光を輝かすための城づくり・町づくりが進められた。それ以前の鎌倉や小田原でなく，関東一円から全国を支配できる大平野中心の沖積地で港を持つ江戸に，軍事支配の城造営が「天下普請（ふしん）」として新しく大規模に開始され，それに応じ武家地や出入りの商人・職人（大工左官など）の町場が周囲につくられ始めた。

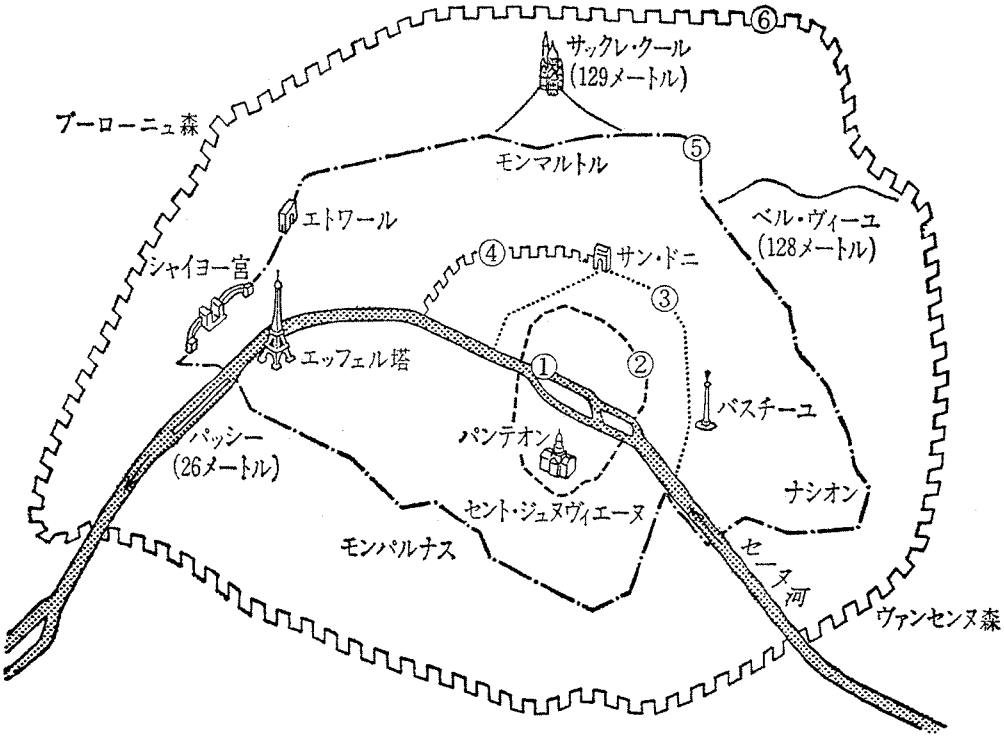
戦国時代後期から農業の生産性が向上するにつれ兵農分離，商農分離が進み，山頂に置かれた城で敵襲を防ぐ「城堅固」の軍事施設から，近世に入ると武士や商人を城下に集め軍事力経済力を動員しやすいよう，城と周辺城下町を平野部に置く「所堅固」を重視の施設となってきた。この極大化されたものが，江戸城とその城下町である。

建設の手始めとして，奥多摩から築城用の石材（壁塗り漆喰（しっくい）用の石灰石）や木材（四谷丸太）等を搬入する「青梅街道」の建設が，幕府から緊急に（1606年）八王子の代官頭大久保長安に命じられた。同じく房州方面から塩，砂利，海草（漆喰の材料）等を大手門まで舟運で搬入出来るよう「道三堀」や小名木川が整備される。さらに石垣用の巨石を求めて伊豆の採石場，また地上5階地下1階の本丸建築用巨木を求めて木曾山林の小谷借り（立木を揃え谷に集め川筋に引き出す）の装置等が整えられ，大規模な建設作業が膨大な人力を動員し始められた。

日本橋を起点に5街道が整備され，軍事都市江戸への敵襲を防衛するため，東海道入り口の芝に増上寺（1598に家康が移設），同じく奥州道中の上野に寛永寺（1625）が，平時は将軍の菩提寺，戦時は多くの武士が篭もれる江戸城の前進陣地として設けられた（寛永寺のすぐ南に御徒（おかち）町 —— 将軍警護の走衆が駐在）。西の郊外に，戦時には武器を持ち戦う農民「八王子千人同心」（幕末に新撰組隊士を生む）が設けられ，新宿近くには新旧町名が示すごとく二十騎（弓組，鉄砲組），箪笥（たんす）（武具），百人（忍者の伊賀衆），鷹匠（軍事演習に参加）等の防衛組織が設けられ，江戸城西門に伊賀同心頭たる服部半蔵の名を冠した「半蔵門」が設けられる。やがて江戸城周辺に順次大名や旗本の屋敷，全国から集まる町人の下町も形成され，江戸城の本丸から多くの櫓・城門まで完成した1640年頃には，人口50万近く，面積44平方キロメートル（京都の2倍）の大都市が世界史に登場する。

17世紀前半のこうした巨大城下町の出現は，ヨーロッパ大陸や中国などの都市像に慣れた目には奇異に映るようだ。パリを見ると，町は歴史的にすべて城壁に囲まれ，市民は皆その内部

第1図　パリの城壁のひろがり



①シテ島(古代ローマ時代)　②フィリップ・オーギュスト(1180～1223)の城壁　③シャルル五世(1364～1380)の城壁　④ルイ一三世(1610～1643)の城壁　⑤徴税請負人(ルイ一四世下)の入市税確保のための城壁　⑥チエールの城壁(1840～1845)

柵著『世界の都市をめぐって』(岩波新書より)

に住む。江戸のように城の周囲に拡散して住むのでなく，城壁の内側に集住する。その都市が発展し拡大するにつれ，第1図に示すように古い城壁を壊し，その外側に新しく拡大した範囲の城壁を築く。古代パリは，セーヌ河の中の島にあたる ① シテ島（ノートルダム寺院や市役所にあたるオテル・ド・シテがある）から発展し始め，12世紀に入り ② フィリップ・オーギュストの城壁内に発展し，以後同図の示すごとく時代を経て ③，④ とパリの市域つまり王宮を含む市民居住の場が拡大する。城壁外つまり市外の農道や住居区は錯雑していても，城壁（市）内では全て名の付く街路が整然と馬車が疾駆できるよう幅広く碁盤の目型か放射状に整備され，街路両側の住居番地も数字の順につけられる。いまエトワール広場中央に高さ50メートルの巨大な門が聳えている。それは ⑤ の徴税門を壊し，アウステルリッツにおけるナポレオンの勝利を祝して凱旋門をつくり，彼がそこをくぐりシャンゼリゼー通りを華麗にパレードするはずだった。だが彼の失脚で建設工事が遅れ，1836年の完成時には城壁 ⑤ はすでに取り壊され，⑥ へと拡大されていた。結果として凱旋門のみが広場に聳える形となる。

領主なり王は，周囲の城壁を出来るだけ堅固につくり，敵の襲撃から内部に住む自分たち一族と市民を守ろうとする。ドイツでも市民を意味するBürgerの語源はBurgすなわち「城」であり，このBurgはまた「安全な場所」の意味もある。ロンドンも17世紀時代，まだ「城内の97教区と，城外の9郊外教区」といった表現をしている。韓国の首都ソウルも，かつては城壁に囲まれ，東大門・南大門など4門のみが外部との出入り口（夜は閉門）であった。中国も長らく城壁が都市を囲み，現在でも都市を「城市」と呼んでいる。中近東でもこうした事情は多く共通する。

他方江戸は，周辺を城壁に囲まれていないから，先に町名で示したような個々の防衛施設はあるにせよ，敵は市域内に侵入できる。しかし一旦市内に入ると，町名や細い道路が錯雑し，いたる所に袋小路や片違え（城を直接見通せないよう道路を途中でわざと直角に屈曲させたりする）が設けられ，住民を巻き込む市街戦で放火略奪が起こるだろう。だが敵はなかなか城に到達し内部に攻め込むことができない。各町に夜間閉められる木戸はあったが，それは町内の治安を保つためである。この江戸の庶民が住んだ町場の狭小屈曲した道路は，ほとんどそのまま明治維新後の東京へ続く。

欧米大都市を訪れても，番地入り道路地図と方位磁石を持ち電車や地下鉄，バスの乗り方さえ教われば，翌日からまずどこの名所や家でも訪問できるはずだ（ニューヨーク市内でグリニッチビレジや南ブロンクスといった地域に例外はあるが）。今の東京ではとてもこの真似は出来ない。外来客からよく「東京人は何と都市計画のセンスがないのか」といわれるので，「外敵の侵入を市内で混乱させ王城を防ぐためには，戸京ほど緻密によく出来た都市はない」と答えることにしている。

世界二大市の膨張 — 戸京とニューヨーク市

戦後姉妹市として交流を深めた世界の二大市が，東京とニューヨーク市である。ヨーロッパの大都市がほとんど皆千年いや二千年以上の歴史を持ち，ローマは勿論パリもロンドンもその歴史は古代ローマにさかのぼる。途中の戦乱や伝染病，王朝の交替などで市人口の増減はあったが，昔の小村から漸次区域や人口を拡大し，今日の大都市に成長している。しかるに上記二大都市は，同じ17世紀当初に人口ゼロに近い小村ないし原野に誕生し，現在ともに世界のグローバル超大都市になっている。江戸の開府が1603年とのべたが，ニューヨーク市のそれは，ヘンリー・ハドソンがマンハッタン島を発見し（1603年頃）オランダが埠頭を建設した1609年といえよう。ウォール街の端緒となる防壁（棚）が1653年につくられ，オランダやイギリスの支配下から1789年の米国独立でここが自治市として発展する。こう書くと両市の歴史が似ているようだが，内容が大きく異なる。江戸は後述する参勤交代制で17世紀前半すでに人口50万近く，同世紀末で100万近くと急膨張するが，ニューヨーク市は第1表（A）に示すごとく2世紀を経た1820年で15万，同40年で39万にしか増えなかった。

ペリー提督来航前の江戸の人口は130万近くと推定されるが，ニューヨーク市はまだその頃69万ほどである。同市が本格的な発展をみるのは南北戦争が終り，米国西部への大発展で同市が旧大陸からの資金と移民流入窓口となった

第 1 表　2 大都市の人口推移

（単位：万人）

A　ニューヨーク市		B　戸京区域	
年　次	人　口	年　次	人　口
1800	8	1603	微小
20	15	1650 頃	50 万近く
40	39	1700 頃	100 万近く
50	69	1800 頃	130 万近く
70	148	1880	96
90	251	90	149
1900	344	1900	201
10	477	10	287
20	502	20	370
30	693	30	541
40	745	40	735

1870 年あたりからで，以後 10 年おきに人口が 100 万単位で急増する。他方戸京は，幕末の混乱や維新で大名武士たちの帰郷のため 70 万ほどに減るが，以後成長し第一次大戦の好景気で多摩や島しょを加えた都区域の人口は第 1 表 B のようになる。

第一章　世界に比類なき制度

それは何だ？

欧米都市の研究者が集まる国際会議で，東京の前身江戸にさかのぼり「参勤交代」の制度を説明すると，参加者が「それは何だ？」と一斉に質問の手が挙がる。なるほど，ヨーロッパ史で強力な封建領主や絶対王政の歴史は多々あり，フランスのブルボン王朝，オーストリアのハップスブルグ家，ロシアのロマノフ王朝などの強権専制ぶりは有名である。しかし大名が隔年に大勢の家来を従えて江戸入りをし，そこの屋敷に駐在を強制され，さらに妻子を幕府の人質にとられる姿は，会議参加者の理解を絶するようだ。「大名が上・中・下と三大屋敷を江戸に構え」に説明が及ぶと，ポーランド代表が手を挙げ「16 世紀末に首都となったワルシャワに，わが領主たちも立派な邸宅を持ち，時々領地から出て来ては首都の社交界を楽しんだ」と理解を示してくれたが，どうも本質はそれと大分違う。

江戸時代の『鎖国』となると，かつてのチベットやブータン，現在の朝鮮人民民主主義共和国の例はあるにせよ，隣国の都市と常に交流してきた欧米の都市研究者にとり，大きな好奇心がそそられるようだ。世界を驚かせるこれら二制度は，その後の東京にも色々影を落とす。

第 1 節　江戸幕府の専制体制

幕府が高圧的に出たのは，まず西の朝廷に対してである。関が原合戦勝利の翌年に家康は京都所司代を置き，1609 年の宮中密通事件に前例を破り強硬に内部介入をし，後陽成天皇を困惑させる。三代家光になると「生まれながらの将軍は余なり」として，さらに宮中に干渉し，天皇の紫衣（しえ）着用勅許の綸旨（りんじ）を幕府が取り消すという前代未聞の強硬策をとる。抗議した大徳寺

の三僧を流罪にし，これに憤激した後水尾天皇が突然譲位したのが「紫衣事件」である（第2表参照）。

隠居しながら隠然たる勢力を保っていた秀忠前将軍の死（32年）により，家光は二元政治を解消させ，老中松平信綱（知恵伊豆 ——「出づ」の評判あり）と二人三脚の形で中央集権の強化を強行する。まず1634－36年の間に「日光見ずして結構というなかれ」と豪華絢爛の同東照宮を造営し，桂離宮をはじめ文化の中心を誇る京都から人心を東に奪おうとする。この勢いで35年に外様大名の参勤交代制を敷き，42年に譜代大名に拡げる。各大名は自己の藩政では相対的自主性が認められたようだが，軍事に関しては完全に幕府がその統制権を握る。僅かな落ち度を口実に，大名の転封や廃絶（改易）を繰り返し，大名の恐怖心を煽り服従を強いた。

外交，貿易も，幕府が完全に独占権を握る。1549年のフランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸以来，キリシタンの布教が西南日本に浸透してきたが，遂に1635年に鎖国令が出され，西欧の光はオランダを通し出島から僅か差し込むのみとなった。江戸幕府が成立してから参勤交代と鎖国の二制度が確立する間の家光・信綱時代は第2表のようになる。

本表が示すごとく，家光と信綱は一心同体の形で，徳川幕府の専制支配実現を進める。まず1604年家光の誕生で，信綱がその小姓近侍 —— 守り役となる。将軍後継をめぐる紛糾があったが，春日局の直訴で家康が決定を出し，若き家光が26年に京へ上洛し将軍の宣下を受ける。供奉する信綱は，小姓番頭そして伊豆守となる。前将軍秀忠の死により，家光は支配の力を独占する。これを支える信綱は，僅か2年間に老中並み勤仕，六人衆（若年寄），老中，忍（おし）城主3万石と飛躍的昇格を続ける。34年に家光は大勢の供奉を従え上洛し，以後天下の中心は江戸なりとして，幕末動乱期まで将軍の京都行きはなくなる（将軍宣下は勅使が江戸に来て行う）。翌35年に参勤交代と鎖国令を強行する。

前述したように，ニューヨーク市（そして西欧大都市）と比較を絶した16世紀前半における江戸の人口急増があった。1635年前後から全国の大名がそれぞれ多数の部下を連れ，隔年参勤交代で江戸に駐在する。古今を通じ，世界のどの都市もその人口規模は水の供給量で限られる。島原の乱平定の功で川越城主6万石から7万5千石になった信綱は，これをどこまで予想したか，ともあれ新開地江戸における突然の人口急増で，井の頭池からの神田上水などでは到底賄い切れない。さりとて幕府の参勤交替制を止めるわけにはいかない。信綱はいわば総理大臣兼埼玉県知事として，江戸の急発展と川越藩の現新座，志木方面にたいする農業水利と，双方を考えねばならない。事態は緊急を要する。

信綱は野火止用水を小平まで掘削し，同時に玉川庄右衛門・清右衛門に請け負わせた形をとりつつ，腹心安松金右衛門を使い人員機材を大動員し，正味一年ほどで延長42キロ余高低差93メートルの玉川上水を完成させ，野火止用水（伊豆殿堀）へ引水させる。これより20年ほど前にロンドンで類似の用水建設例はあるが，やはり上記の工事は狸堀りや水喰土（みずくらいど）（土質により流水が地下に吸収されてしまう）対策などを含め国際的に高い水準（オランダから一部技術を学ぶの説はあるが）を示す。この上水建設については，かなり後に出された「上水記」

第 2 表　徳川幕府 —— 家光　信綱の関連年表（17 世紀前半）

海外関係	日本（徳川幕府）	徳川家光	松平信綱
1549 ザビエル鹿児島に上陸	1542 徳川家康生まれる		
	87 秀吉キリスト教禁制		
1600 英東印度会社	88 刀狩令	1596 誕生	
02 和蘭東印度会社	98 秀吉死去	1601 松平家を継ぐ	
09 ニューヨーク開拓開始	1600 関が原の合戦		
	03 江戸開府	04 誕生	1604 家光小姓近侍
13 英東印度会社平戸に商館	05 秀忠将軍に		（０９和蘭平戸に商館）
	09 家康宮廷に介入	11 春日局家康に直訴	
14 高山右近国外追放	14 大阪冬の陣		
16 シェークスピア死す	15 同夏の陣		
	16 家康死去	20 元服	20 采地５００石上洛に供奉
22 元和大殉教	19 福島正則改易	23 上洛将軍宣下	小姓組番頭伊豆守
23 朝鮮通信使来る	22 本多正純改易	秀忠隠居	
24 幕府スペインと断交	24 江戸猿若座	26 再度上洛右大臣に	24 ２千石に
	31 奉書船		27 １万石大名
24 蘭台湾占領	32 加藤忠広改易	29 紫衣事件	30 １万５千石
29 長崎踏絵	33 徳川忠長改易	32 秀忠死去	32 老中並み勤仕
33 奉書船以外海外渡航禁止	34 日光東照宮造営	二元政治解消	33 六人衆信綱供奉
	36 造営完了長崎出島完	34 上洛供奉三十万	
35 鎖国令		35 武家諸法度参勤交代制度	34 老中忍城主３万石に
36 清朝成立	40 宗門改役		
41 和蘭風説書幕府に提出	42 譜代大名も参勤交代	37 島原の乱	37 島原討伐上使
		39 鎖国完了	38 島原乱鎮圧
44 明朝滅亡	43 田畑永代売買禁	42 寛永飢饉	39 川越城主６万石
48 和蘭共和国独立	46 日光奉幣使	46 綱吉誕生	47 ７万５千石に
51 英航海条例	51 由比正雪の乱（慶安事件）	51 家光死去	51 幕閣頂点に
52 英蘭戦争		52 江戸市村座	53 玉川上水工事始
	53 佐倉宗五郎の直訴	55 江戸市中法度	54 野火止用水とともに工事完信綱隣に安松金右衛門墓
55 朝鮮通信使来る		57 明暦の大火	

ルイ 13 世 1601-1643　関孝和 1640 ころ-1708　ルイ 14 世 1635-1715　芭蕉 1644-1694　初代団十郎 1660-1704
W. Petty（1623-1687）　W. Shakespeare（1564-1616）　一茶 1763-1827　歌麿 1753-806　北斎 1760-1849

（1791 年）や「玉川上水起元」（1803 年）が諸説を伝えるが，経過の本質は上記のように思われる。家光の死を機に，由比正雪の乱（慶安事件），佐倉宗五郎の江戸直訴，明暦の大火など江戸に社会不安は重なったが，信綱はこれらを制し，江戸を中心とする参勤交代と鎖国を通じ国内における幕藩体制を極めて強固なものとした。それを見とどける形で 1662 年に没す。

第 2 節　鎖国・参勤交代の功罪

戸京が四百年を経た今日，鎖国や参勤交代という世界でも珍しい制度を如何に評価するか？それ以前，農民の子から関白にまでのし上がった秀吉は，既存勢力を打破する革新代表のはずだったが，最高位に就いた瞬間に保守の権化となり，自己への権力集中のみを考え，その延長

として中国制覇をめざす朝鮮出兵という愚かで残忍な行動に出た（慢心した彼が交易商人の儲け話に乗せられた？）。この国内保身の道を忠実に継いだのが徳川幕府であり，それをさらに強固にするため家光・信綱が鎖国と参勤交代の二制度を完成させた。

和辻鉄郎「鎖国 —— 日本の悲劇」（岩波文庫）はこうした事情を論じつつ，西では既にフランシスコ・ベーコンの近世思想（「理想郷物語」1627刊）が現れ，日本でも安土桃山のルネッサンス文化が折角花咲いたのに，徳川幕府は自己の体制維持をすべてに優先させ，二千年も昔の儒教精神を強い，その花を摘み取ってしまったとする。

こうした国際感覚のなさが明治後の為政者にも継がれ，日清・日露・第一次大戦から中国へと海外進出を続け，ついに第二次大戦の東京大空襲，3・10下町の悲劇（ベトナム戦の最高指揮者マクナマラ国防長官は当時この作戦参謀）にまで至ったといえよう。

安土桃山時代から現在までを長期に見れば，確かに上記となろう。しかし江戸期のみを見れば，秀吉の朝鮮出兵に対し明朝か清朝を援軍とする朝鮮の日本への復讐侵攻もなく，江戸の町人は鎖国令が出てからペリー来航までの二百余年間，太平の夢を楽しみ文化芸術を築くことが出来た。戦乱に揉まれた近世ヨーロッパ都市からは，羨ましく見えよう。

江戸時代後期だが，宇和島藩10万石の江戸屋敷における家中・奉公人の合計は1千人を上下し，国許の同じ数5千余人の2割近くを示す。同じく松江藩江戸屋敷の財政支出をみると，江戸入用，奥向き入用や道中銀（参勤交代費用）を合計すると，藩の財政支出の平均31.5％を占めたと推定される。全国で生産される富の大部分が，江戸城と参勤交代の江戸屋敷を通じ，この巨大都市に集中吸収される。まことに江戸は驚くべき大消費都市である。将軍そして武士が支配する江戸だが，この巨大な消費をめざし商人や大工・左官さらに流民などが次々に地方から流れ込む。出身地の伊勢，越後，遠州，佐野といった屋号をつけた表店が下町にならび，同じく流入し続ける奉公人（小僧，下女）や職人，物売りなどが表店の2階奥や密集した裏長屋に住み込む。「江戸は諸国の掃溜（はきだめ）」などとよく言われた。

掃溜の回りが凡そ十六里

260余とされる大名の家来の1割から2割が「勤番（きんばん）」と称し，妻子を国に残し交代で江戸に単身駐在する。市人口における性比（女性100人にたいする男性数）は，女性の社会進出度などを示し興味深い。1958年当時の統計では，パリ82，ロンドン88，大阪105，東京108にたいし，インドのカルカッタは187であった。それに対し参勤交代が本格化する1733年で173と江戸は，男性が女性よりはるかに多い町だった。

芭蕉の高弟宝井其角（きかく）が1682年に詠んだ句：

闇の夜は　吉原ばかり　月夜哉

江戸の各所に散在していた遊女屋が1617年に日本橋葦屋町に集められ，同57年の明暦大火（振袖火事）を機に現台東区に移る。17世紀後半になると勃興する商人階級に支えられ，新しい不夜城吉原が，江戸ッ子にとり「粋」の象徴と繁栄し始める。出雲阿国（いずものおくに）が歴史に登場するのは1603年（西におけるシェークスピア「終りよければすべてよし」の創作年）だが，間もなくその流れを汲む江戸歌舞伎が発展し始め，

早くも 17 世紀後半，第 2 表下欄に示すごとく初代市川団十郎が荒事で江戸町人の人気を集める。観客は桧舞台の俳優に注目するが，実際はそれを際立たせる衣装や鬘，三味線伴奏の長唄・常磐津・清元，さらに舞台装置の裏方さんまで，それぞれ声や腕を競い合う。またそれらのデザインや和楽が，趣味娯楽の対象として町の旦那衆やおかみさん連に広く浸透する。落語や講釈の寄席も，江戸後半には 400 軒に及んだと。

広大な自然や複雑な人間心理を 17 文字に詠み込む「俳句」は，世界一短い詩とされる。1672 年から江戸に住む芭蕉は，多くの門人を持っていた。同 89 年 3 月に旅立った「奥の細道」の本文書き出しに「住める方は人に譲り，杉風が別墅に移る」とある。深川六間堀の芭蕉庵を譲り，門人杉風の別宅に移るのだ。この杉風は，日本橋小田原町の魚問屋主人で幕府御用商人だった。芭蕉にとり生活のサポーターにもなる豊かな門人が，既に江戸に多くいたのである。

菱川師宣は同 60 年代に江戸に出て浮世絵の祖となり，江戸後期になると歌麿や写楽・北斎といった絵師を輩出し，フランス印象派画壇に大きな影響を及ぼす。ゴッホは，浮世絵の横に書かれた漢字まで真似て習作しているし，ロートレックも清長や春信を研究した。同じく 17 世紀後半に活躍した関孝和の高等数学は，当時世界の一流に伍したと聞く。山東京伝らの黄表紙本・滑稽本なども，貸本屋を通じ江戸の小僧や下女にまで読み回され，江戸後期 1808 年において貸本屋が 656 軒もあり，定まった得意先を 10 万軒も持っていたと。商人の活動を通じ，「読み書き算盤」が丁稚・小僧にまで普及し，識字率が庶民の間にも極めて高くなった。明治以後の義務教育普及の素地が，既に江戸時代に寺子屋などを通じ培われていた。鎖国による平和を長く享受出来たおかげで，商人を中心とする江戸の文化芸術が国際的にもかなり高く展開されたことは，その功績といわねばなるまい。

第 3 節　予期せざる功績 ― 悪性伝染病の経路遮断

家光も信綱も鎖国強行に当たり予期しなかった江戸への功績 ―― それは悪性伝染病の伝染経路を遮断し，この大都市への被害を阻止ないし軽減させたことである。それ以前より欧州諸都市は，悪性伝染病の爆発的流行に深刻な被害を受けていた。この種伝染病は，一度流行し拡大すると，人口密度の高い大都市で短時間にその人口の 6 分の 1 も死滅させるほどの猛威を振るう。十字軍あたりから東方貿易が盛んとなったヨーロッパ諸都市は，14・15 世紀頃にペスト（黒死病）流行による大きな被害を受け，社会的混乱をもたらし，イタリアの小説デカメロン（1348-53 作）といった作品を生んだ。幸いこの頃日本はまだ遠隔の地にあり，欧州は勿論，ペスト・コレラの源流とされるインドや南アジアとも交流がなかったため，この時期を通じこうした深刻な被害を免れえた。

第 2 表でザビエル 1549 年来日としたが，その直前 43 年に鉄砲の伝来があり，さらに早く「梅毒」が国際化の先端をなす形で日本に到来している。梅毒は，コロンブスが新大陸発見（1492 年）の際ハイチで船員が拾いヨーロッパに持ち帰ったとされるが，以後大航海時代の勢いで東進し，早くも中国南部に達していた。そこをわが倭寇が襲い，日本への望まざる土産と

して持ち帰り，以後ひそかに広く国内そして江戸の町に伝染する。

古くから日本における伝染病とされるのは「結核」である。平安時代の源氏物語や枕草紙に，それと思われる若き女性の病状が記述される。また第3表の江戸振袖火事の由来は，火元の本郷丸山本妙寺で，棺を蓋う一枚の振袖衣装をめぐり，生前それに手を通した若き娘が3人も次々と3年間同じ日同じ年齢で死んだ。同寺の和尚が因縁を恐れ，その振袖を焼いたところ，一陣の風とともに怨念の炎が舞い上がり，江戸を焼き尽くす大火になったという。3人の娘は，今日でいう結核の病（当時の労咳（ろうがい））とされる。

江戸時代に入って，恐れられた伝染病の主は梅毒や結核であった。これらの病原は個人から個人へと時間をかけ1，2，3と算術級数的に拡がる。だがヨーロッパに荒れたのは主にペスト，コレラで，これによる患者数は2，4，16，256と瞬時爆発的に拡大し，万単位の死者を出す。江戸時代にも長崎や下関から，中国や朝鮮との交易（密貿易）を通じコレラの伝わる例はあったが（例えば1822年）幸い局地で収まり，大江戸までは伝わらなかった。この面から都市問題の認識はなしで済まされた。

第4節　都市問題の把握 ― ロンドンと戸京の都市政策

1）都市問題の認識

グラントの「死亡表」

為政者なり識者が，都市の存続・発展にたいする阻止要因をいかに認識するか，これが「都市問題」把握の出発点であり，その解決を求めて「都市政策」が出される。近世以来世界経済の先頭に立ったのが英国であり，関が原決戦と同じ1600年に東印度会社が設立される。そして同方面への進出と富の本国への吸収（収奪）が本格化し，首都ロンドンが急速に発展し始める。このインドなどアジアから莫大な富を本国へ吸収する過程そのものが，同時に恐ろしい激烈な伝染性の病原菌を運び込むこととなり，ロンドンなどの大都市に流行し，大量の死者を生じ経済損失が憂えられてきた。ここに「都市問題」の認識・把握が始まる。

何時頃から如何にこの把握が始まったのか？第3表に示す如く，1662年に発表されたジョン・グラント「死亡表による諸観察」あたりからといえよう。著者は「私はロンドン市内に生まれ育って人民を平和と豊富のうちに保つのが目標」とのべながら，眼前に展開される市民のペスト（黒死病）死亡の観察と克明な統計づくりを1592年のデータから始める。黒死病の死者が出ると，寺男が検屍役に知らせその死因を確認して教区書記に報告する。その報告を収録した教区別記録を，ロンドンの城内97教区と城外の9教区にわたりグラントは集計して調べ分析する。そこで取り上げられた流行年の死亡合計や出生数などを第4表に示す。

まだ17世紀前半だから，死亡の病名や黒死病の分類に誤りや遺漏はあろうが，1603年など死亡数合計の82％ ―― 8割以上（B／A）がペストによるものであり，死亡合計Aが出生数の8倍（B／C）に近いとする。ロンドン大火の前年1665年には，死亡合計の7割（B／A）に当たる7万人近くがペストの猛威に犠牲となっている。グラントの優れた点は，この全体像を統計として捕らえ，原因を都市全体の社会的あり方や環境から捉えようと試みたことで

第 3 表　都市問題の把握 —— ロンドンと戸京の都市政策対比

ロンドン関連		戸京関連	
1600	英国東印度会社設立	1600	関が原の合戦　家康勝利
01	エリザベス救貧法	03	江戸開府
27	F・ベーコン「理想郷物語」	35	鎖国と参勤交代制実施
51	T・ホッブス「リヴァイアサン」	57	明暦大火（振袖火事）
62	J・グラント「死亡表に関する諸観察」		以後火事が頻発する
66	ロンドンの大火（以後大火なし）	66	荻生徂徠生まれる
82	W・ペテイ「ロンドン市の政治算術」	82	八百屋お七の火事
1770 頃	産業革命開始　98 ジエンナー	1726	荻生徂徠「政談」
1834	ロンドン統計研究会設立	1822	コレラ日本西部に来る
42	E・チャドウイック報告書	53	ペリー提督来航
48	公衆衛生法	54	日米和親条約
55	ロンドン首都工務庁の新組織	58	コレラ流行　江戸種痘所
	首都下水道建設開始　この頃ミュンヘンでペッテンコーファー活躍		
82	R・コッホ結核菌発見	68	明治維新
83	同コッホ　コレラ菌発見	77	コレラ流行（西南戦争）
84-88	森鴎外ドイツ留学	79	コレラ流行
89	北里柴三郎破傷風菌培養	89	森鴎外「市区改正は果して衛生上の問題に非ざるか」
94	同北里ペスト菌発見		
97	志賀潔赤痢菌病原体発見	92	北里伝染病研究所設立（99 に国立）
1901	ペッテンコーファー自殺	97	伝染病予防法公布
10	秦佐八郎サルバルサン 606 号発見	99	ペスト流行
11	野口英世梅毒スピロヘータ培養	1907	ペスト流行死者 320 人
	F・ベーコン 1561-1626	08	コッホ夫人と来日
	J・グラント 1620-74	14	私立北里研究所
	W・ペテイ 1623-87	16	北里慶応大学医学部長に
	E・チャドウイック 1800-90		同年　工場法施行
	R・コッホ 1843-1910		北里柴三郎 1852-1931
	M・ペテンコーファー 1818-1901		志賀　潔 1870-1957
	秦　佐八郎 1873-1938		野口英世 1876-1928
	参考：「解体新書」1774		高木兼寛 1849-1920

注：アジアの医学史から見て，１８世紀に「解体新書」が邦訳されたのは偉大なことである。高木兼寛は当時の兵士にとり難病だった脚気に，ビタミン食による解決策を立てた。

ある。江戸でも死亡は，各寺の過去帳に記録はされたが（出生はない），それらを江戸全体として統計的に集約し，社会的に分析しようとした試みは見当たらない。

ペテイ　に見る「市民の値打ち」

『政治算術』（1690）で英国経済を統計的に分析したウイリアム・ペテイは，経済学の祖とされ，グラントと交流を深くしていたが，1682 年に「ロンドン市の政治算術」を著わしグラントの理論を深化させる。彼は，当時のロンドンの人口は 67 万で過去 40 年間に倍増したとしながら，今後同市の基本政策を検討するため，まず人口を 7 倍とする拡大方向にとるか，反対に 7 分の 1 と縮小方向にとるかと二つの仮定を立てる。そして項目を防衛，治安，行財政，貿易，交通，社会保障（当時は救貧法の扶助），衛生

第4表　ロンドンにおける死亡・出生数（黒死病流行時）

年次	死亡合計A	うち黒死病B	一般死亡A－B	出生数C
1592	25,886	11,503	14,383	4,277
1603	37,294	30,561	6,733	4,784
1625	51,758	35,417	16,341	6,983
1636	23,359	10,460	12,899	9,522
1665	97,306	68,596	28,710	

注：グラント「死亡表」より作成。年次では主に3月より12月の間を扱う

に分け，拡大か縮小かの両方向でそれぞれ起こるべき事態やその評価を論じる。

分業による時計製造の例などを引きながら，一般に都市拡張政策を採る方が生産性向上に有利としつつ，マイナス項目として衛生を挙げ，大都市で人口が過密となるほど悪疫（黒死病）伝染による被害が加速度的に拡大するとする。ここで彼の悪疫による病死者の被害額算出の基礎として「市民一人の値打ち」を推定する。すなわち彼の計算で，イギリス600万の国民が毎年2500万ポンドを産み出すから，当時の年率6％で割り戻すと国民全体の資本価値は約4億1700万ポンドになると計算。これを人口1人当たりにすれば，69ポンドになる。さてロンドンで一度悪疫が流行し12万人が死亡すると仮定し，69ポンドに12万人を乗じ，計840万ポンド近くの損失が生ずるとする。

これを防ぐために如何なる都市政策を講ずるか。当時の経験的知識では，伝染病発生とともに市民は即刻発生源から遠くへ避難することであった。ペティはロンドンにおける具体策として，発生と同時に発生源から周囲半マイルの住民をロンドンの外周35マイル（約50キロメートル）の地に3ヶ月間避難させ，伝染病の終息を待ち帰還させれば被害が防げるとし，その費用として往復交通費，宿泊費，食費など計5万ポンドと積算する。つまり彼は「費用便益計算」をし，5万ポンドの都市政策費を支出すれば840万ポンドの半分としても，84倍もの利益が得られるとする。さらに注目すべきは，彼が本文の注で「悪疫で最も多く死亡するのは，狭く雑居している貧乏人」と指摘していることだ。

荻生徂徠の「人返し」政策

江戸の都市問題を取り上げ，それに対する政策を提唱した当時最高の知識人は，将軍吉宗の師を勤めた荻生徂徠（おぎゅうそらい）（ロンドン大火の年に誕生）といえよう。彼が将軍に献呈した人民支配の要諦を内密に示す『政談』（1726）は，一部を現代風に改めると「諸国の民の工・商の行をする者，棒手振（ぼてふり）・日雇取などの遊民も，在所を離れて江戸の御城下に集まる者年々に弥増して（ペスト・コレラによる大量死もなく）町の家居夥しく成り，北は千住より南は品川まで立ち続き・・当分は賑やかに繁盛に見えて栄（めで）たき事なれども，奥筋に事あれば仙台の米は入りまじ，西国の方に事有れば上方の米は入りまじ。其の時御城下の民食に飢えて騒ぎ立たん。しかる時は何と静めても沈静する事は難かるべし」つまり「地方の在から遊民が限りなく江戸へ流入してきて，当面は賑やかに繁栄するように見える

が，この城下町で一朝有事の際には，仙台からも西国からも米が入らなくなり，飢えた群衆が暴動を起こすだろう。そうなれば，とても靖(しず)め難かるべし」というのだ。

江戸に無用の人間が多すぎ，一朝有事の際暴動を起こすと手がつけられなくなる —— これが徂徠にとっての「都市問題」だった。将軍による，将軍のための江戸城を安泰に護ることが第一である。従って武家や出入りの商人・職人など正業の者に「人数を限り，其の外は悉く諸国へ返えすべし・・民は愚なる者にて後の料簡無き者成」と断じる。江戸の庶民は愚かで明日も考えない者，つまり人間としての値打ちが無く，むしろ暴動を起こすマイナスの価値しかないと将軍に耳打ちする形だ。そして江戸幕府は貨幣経済に巻き込まれ，「暮らしの物入り莫大にして武士の知行は皆商人に吸い取らる也」と訴える。江戸幕府最高の識者つまり為政者は，町に溢れる一般庶民の値打ちは，ゼロかむしろマイナスと考えたようだ。すべての都市政策は江戸城第一主義から始まり，頻発する大火で大勢焼死しても，それだけ厄介な邪魔者が減ると扱われたと言わざるを得ない。

2）西欧都市政策の展開

18 世紀後半，工場制の普及する産業革命に入り，ロンドンにも劣悪過密状態の労働者街が拡がり，伝染病の重点がペストからコレラに移りつつそうした地域を中心に流行が続いた。その労働力（人間の値打ち）の大量喪失と死亡遺族（妻子）の生活保障（救貧法による扶助）の財政負担（主に土地所有者税の重課）とが，為政者にとり都市問題と認識されてきた。こうした問題と対策を研究するため，先のグラントやペティの研究を継ぐ形で 1834 年にロンドン統計調査所，37 年に中央人口統計所が開設され，エジンバラ大学に社会医学研究所，パリに研究雑誌「公衆衛生」の発刊（1829 年）がみられた。

チャドウイック報告

かかる事態にたいする対策（都市政策）として，1842 年に英国議会へチャドウイック報告（「イギリスにおける労働者の衛生状態」）が提出される。同報告は 5 部に分かれ，第 1 部に衛生環境の悪い労働者街の状態，第 2 部に衛生状態劣悪により起こる疾病・死亡の多発とそれによる経済・財政的損失，第 3 部に不動産所有者や工場経営者にとり都市の公衆衛生や環境の改善がもたらすプラス要因，第 4 部に具体策として汚水排除のための下水道建設を提言する。この案を基に 1848 年に「公衆衛生法」が出され，住宅の日照や通風を確保し，公園の緑を確保し，特に下水道による汚水排除を重視する都市建設が進められることとなった。

ロンドンの下水道百年記念祭

筆者が 1955 年にロンドンを訪れた際，同市役所（County of London）で盛大な下水道建設百年祭が開かれていた。見ると叙勲に輝く下水道局長が一番上席に座っている。聞けば局長の序列は常にこの順序だと。19 世紀前半まで当市の行政は教会が各自の区域（教区）内で行ってきた。しかし下水道を普及するには，その流域全体に広域行政を布かねばならない。この広域行政のため首都工務庁 Metropolitan Board of Works が新設され，1855 年から同庁により下水道の建設工事が開始された。やがて教区が担当してきた福祉など各種小規模な都市行政が，この工務庁の広域で総合的に行われ

るようになり，同89年に上記工務庁がCounty of Londonとして発足し，対外的にもロンドン市庁となる。ロンドン市の近代行政は，下水道局から始まった形である。下水道局長が筆頭局長に納まるわけだ

ペッテンコーファーの活躍

ロンドンの伝染病を中心とする都市政策の展開は，他のヨーロッパ都市にも及ぶ。ドイツの衛生学者ペッテンコーファーは，ミュンヘン市の伝染病流行による死亡・疾病の損失を年間35万フロリンと計算し，これを5％で資本還元して全市民の値打ちを700万フロリンとする。つまり都市計画の改良（下水道建設）事業に700万フロリンまでの予算支出をしても可とし，実際の計算で下水道建設が34万6800フロリンの節約になるとした。この費用便益計算に従い都市政策の中心として下水道建設が進み，1881年に完成した。おかげで，同市の腸チフスの死亡率は人口1万あたり同72年の24.0が81年に1.8，95年に0.4に減る。

3）輝ける細菌学研究

細菌学の祖ロバート・コッホ

先の第3表のごとく，19世紀後半に入るまで，ロンドンなど欧州の諸都市は伝染病の流行と死亡者の増加に悩み，それを防ぐ環境改善の都市政策を大きく進め成果を揚げていた。そこに「病原菌があるから病気になる」との主張が登場してきた。先鞭をつけたのがドイツのロバート・コッホである。彼は顕微鏡による研究を通じ1876年に炭疽菌を発見培養し，その感染経路を突き止めた。続いて82年に結核菌，83年にコレラ菌を発見し，病原菌の体内侵入により発病することを証明した。かくて予防注射の威力を示し，医学界に輝く存在となった。傍系になったと感じたか，環境衛生派の主ペッテンコーファーは1901年に悲劇的自殺を遂げている。

偉大な日本医学界

鎖国で急激に拡がる恐ろしい伝染病から護られていた日本も，開国とともに海外からそれに襲われ，「コロリ」と死ぬコレラが早くも1858年7月に長崎入港の米国船から江戸に達し，不平等条約で港の検疫も出来ず，多くの死者を出した。明治に入っても西南戦争を機会に流行する。この戦争で明治政府の国内にたいする覇権は確立し，西洋の研究成果の吸収に本格的に乗り出した。そこで注目されたのが細菌学である。

熊本医学所から東京大学医科大学を卒業した若き北里柴三郎は，その翌々年に細菌学の開祖コッホのもとに馳せ参じ，師事4年後の89年に破傷風菌の培養に成功し，続いてベーリングとジフテリアや破傷風の抗毒素を発見し，血清療法の道を開いた。かくてドイツにおける7年間の輝かしい業績を提げ，92年に帰国し福沢諭吉の援助で伝染病研究室（すぐ後に伝染病研究所 —— 99年に国立）を創立し，94年にペスト菌を発見する。後に慶応大学医学部長や日本医師会会長となって国内外にわたる医学界のリーダーとなり，多くの後継者を育て男爵を授けられる（この前後先の第3表参照）。

北里に育てられた英才に赤痢菌発見（1897年）の志賀潔がいる。彼の著書「或る細菌学者の回想」（雪華社　昭和41年）から要点を抜くと「私が，なぜ細菌学を選らんだか・・当時の細菌学は新興科学の花形役者で・・大学を卒業すると同時に伝染病研究所に入り，北里柴三郎先生に師事し，その紹介でエールリッヒ先生の

もとに留学した」「伝染病研究所は政府から毎年研究補助費をうけ，各種伝染病の原因及予防法を研究し・・と命令書で定められていた」「明治 30 年の赤痢流行は・・東京府下のみで患者 7 千余名，死者 2 千名を越ゆるという猛烈なものであった」（この患者研究が赤痢菌発見となる）「我邦細菌学の勃興は実に医学の奇観なり・・殆ど先進国をして後に瞠若ならしむるものあり」政府の手厚い援助のもと細菌学の研究に全力を尽くし，後進国日本がここで世界の先端に立った。

同じく北里に師事し，コッホ研究所で過ごし，1910 年に梅毒の化学療法剤サルバルサン（606 号）を発見した秦佐八郎（はたさはちろう）の世界的業績も忘れられない。

千円札に飾られた野口英世が，黄熱病で倒れたガーナの首都アクラには旭日の印を冠した等身大の石碑があり，「ここに野口死す・・」とその栄誉を讃えている。

ロンドンと戸京の都市政策を対比した第 3 表を振り返えると，1600 年に東で関が原で勝利した徳川幕府は江戸の建設を始め，西のロンドンでは同年設立された英国東インド会社がその方面に制覇を進め，巨大な富と同時に恐るべき病原菌をロンドンにもたらした。

ロンドンでは伝染病による人的損失を評価し，19 世紀に入るやその損失を防ぐための医学（公衆衛生）的見地から都市政策（住宅，公園，下水道・・建設や改良）が進められた。

だが江戸では，鎖国のおかげでペスト・コレラの流行もまずなく，新田開発・灌漑整備などによる生産性向上で人口も増加し，農村から労働力が多く江戸へ流入するため，その値打ちは顧みられず，町人のための都市政策など凡そなくてすまされた。だがペリーの来航，開国とともに忽ち恐ろしい伝染病が，不平等条約のため検疫制度もとれず，海外から容易に入り流行し始めた。明治維新から西南戦争の混乱を経て新政府の体制も整い，いざ伝染病対策となり西欧先進国を見ると，そこにコッホの細菌学が新興科学の花形に登場している。

日本医学の俊才がそれを研究し世界に輝く成果をあげた。しかしそれだけ，17 世紀に認識され 18・19 世紀と重ねられてきた医学（公衆衛生）的立場からの西欧都市政策が抜けたまま病原菌研究の成果が専ら重視された形である。

4）鴎外の悲憤慷慨と迷える下水課

軍医に任官し，1884 年から 88 年までドイツに留学しペテンコーファーの活躍に注目した森鴎外は，帰国後直ちに論陣を張る。まず翌年の「東京医事新誌」に「市区改正は果して衛生上の問題に有ざるか」なる表題のもと，やや現代風に表現すると「我邦，衛生大家の数は多い。新聞雑誌に衛生事業を論ずるもの，又何ぞ限らん。しかしかつて市区改正（都市計画）の為に一文を草し，短編を著はしたるものありや。工学・実業の分野からはあれほど多くが市区改正を論じているのに，医学からの発言がどうしてこう少ないのか。自分は不思議でならない」とする。

続いて日清戦争頃まで「日本家屋説自抄」「造家衛生の要旨」など住宅から清掃など都市問題を広く深く論じる。つまり日本の医学は，病気になった人間の治療を中心とし，病気にならぬよう健康な都市づくりを進める方面を粗略にすると悲憤慷慨する。鴎外は，第一に文豪，第二に軍医総監とされるようだが，むしろ第一

を都市問題専門家としたい。

東京政策を論ずる初期の重要な案として，東京府知事芳川顕正の『東京市区改正意見書』（1884－明治17年）がある。そこで彼は「意フニ道路橋梁及河川ハ本ナリ水道家屋下水ハ末ナリ」と主張する。そして「前者の設計が本として定まれば，後者は自然容易に定めることができる」と説明する。彼個人として技術的にこれは正しく，前者はその後整備が進み，後者の水道も上流の川の黴菌で汚染された水を尊い人が飲んだら恐れ多いと20世紀に入り改良が進む。また意見書の「家屋」は家屋の制度についてであった。しかし結果として「家屋と下水」は末と扱われてしまった。下水道計画は何度も立てられるが，1950年代初まで東京の便所が汲み取り式で「糞便ノ如キハ，貴重ノ肥料」（今となれば都市と農村を結ぶ理想的リサイクル）であるし，富国強兵が第一だからその予算は無いと常に扱われ，浅草から神田・下谷の一部辺を除き普及が凡そ遅れた。

せっかく臨時下水改良課が発展して大正末年東京市土木局に置かれた下水課もお荷物と扱われ，同11年折衝の末水道局に移されたが，それも19年に戦局に無用と工事がすべて打ち切られてしまった。「さ迷い消える下水課」と悼む声もあった。筆頭局長に輝くロンドンと末席下水課に泣く東京と，あまりに対照的ではないか。戦後も暫く同じ対応で，オリンピックを招致しようと「コクサイ都市東京」の名乗りに，「コ」の一字が余分だとの声があった。農村に化学肥料が普及する昭和27（1952）年にやっと下水道部，続いて同34年に本部，37年に局と昇格した。以後公共事業の中枢として大きな存在となる。

5）1銭5厘のピヤポッポ

江戸の土地利用は，全面積にたいして武家地が優先して約7割，残りが寺社地と町（人）地の1割5分づつであった。江戸末期の町地面積が891ヘクタール，人口が約48万人と推定すると，1平方キロメートルで5万3900人の密度となる。町人の住宅は，殆どが木造の平屋か2階建てだから，これは驚くべき過密ぶりである。パリはその密度が2万4千人になるが，建物が平均8階（屋根裏部屋を加えれば9階）の石造りだし，英領香港当時のヴィクトリア市は4万人と高いが，ここは高層住宅が多い。江戸で旦那衆の住む表店は別とし，奉公人や職人，さらに人足・日雇い人等の賃借人家族が住む裏長屋は，路地奥に密集するいわゆる9尺2間（上り口と台所・居間で計10平方メートルほど）の粗末な平家の木造家屋（井戸や便所は共同）である。従ってまた「火事と喧嘩は江戸の華」と火災が頻発し，数年に一度の大火が広大な面積を焼失させ多くの死者を出した。前記荻生徂徠が江戸掃溜め論で邪魔者とし『人返(ひとがえ)し』の対象としたのは，こうした在（地方）から流入した身分の低い連中であった。貧しい密集地で多くの焼死者が出るほど幕府は安心となる。

明治に入り，本書冒頭に述べた「ご一新」の声はあっても，大勢の庶民が住む棟割(むねわり)裏長屋の姿は，江戸と凡そ変化が無かった。屋根が飛び火しやすい萱葺(かやぶ)きと柿板葺(こけらぶ)き（トントン葺き）の「焼家(やきや)」が東京における家屋の57％を占めていた。横浜から新橋に着いた異人さんに恥ずかしくないよう，そこから都心に向けたショウウィンドウが銀座煉瓦街であった。その後明治期に市区改正の案が色々出て，官庁街やビジネ

ス街の整備は進んだが，零細木賃アパートの密集地帯は拡がるばかりだった。第一次世界大戦の好景気と労働階級の台頭に際会し，東の後藤新平・西の関一（せきはじめ）といった偉大なリーダーを始め都市改革の論客が多数輩出し，都市計画法制定（1919 年）や同潤会（1924 設立）による近代的アパート建設などが始まったが，満州事変（1931）から日中戦争，太平洋戦争の軍国主義時代に入ってしまい，都市問題の認識とその解決は，防空とか戦争遂行以外捨て去られた。

1873（明治 6）年に徴兵令が出され，89 年以後国民皆兵が原則となった。筆者が中学生の頃（1930 年代後半）軍事教練があり，配属将校からよく「お前たちは 1 銭 5 厘のくせに」とどなられた。当時 1 銭 5 厘の葉書に「徴兵」と赤いハンコを押して出しさえすれば，お前らは幾らでも大勢集められるの意である。1899 年から続いた 1 銭 5 厘の値段は，1937 年まで 38 年間も続いたため，その後もこの値段が葉書の代名詞となっていた。軍隊で兵隊はよく「お前らは 1 銭 5 厘だが，鉄砲を造るには 100 円かかり菊のご紋章が入るから死んでも手放すな。お馬さまは，農家から徴発するのに 800 円払う」と殴られた（後者の馬の値段が本当かどうか怪しいが）。

1930 年代初め，小学校の教室で「1 銭 5 厘のピヤポッポ」と自嘲気味に踊る児童がいた。まだ男尊女卑の戦前，男の値打ちが 1 銭 5 厘とすれば，女性のそれは葉書値上げ前の 1 銭となるか。片道燃料だけの特攻機，自爆専門の人間魚雷回天が工夫されたわけだ。

追記：本文作成に当たり『学際』第 6 巻「江戸と江戸時代」（2002 年 9 月）や石塚裕道『日本近代都市論』（東京大学出版会 1991 年），石田頼房『日本近代都市計画の百年』（自治体研究社 1991 年）などに負うところ多し。